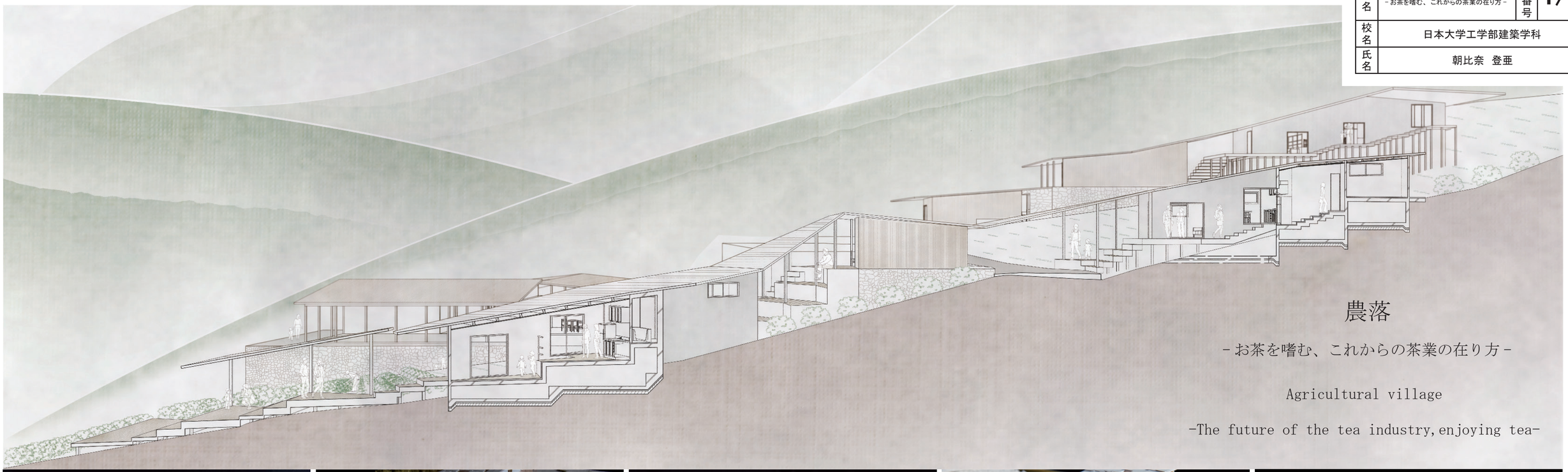
作品名	農落 －お茶を嗜む、これからの茶業の在り方－	作品番号	1/5
校名	日本大学工学部建築学科		
氏名	朝比奈　登亜		

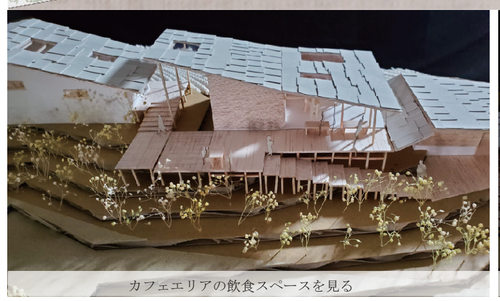


農落

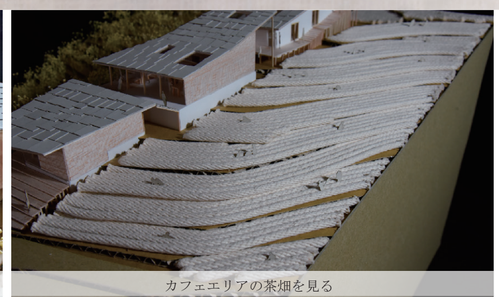
－お茶を嗜む、これからの茶業の在り方－

Agricultural village

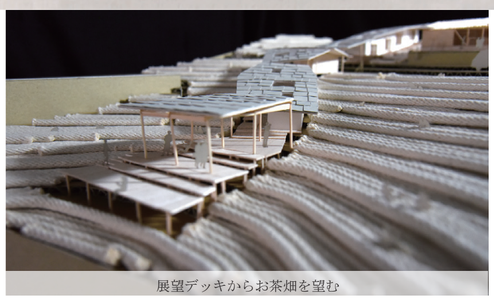
-The future of the tea industry,enjoying tea-



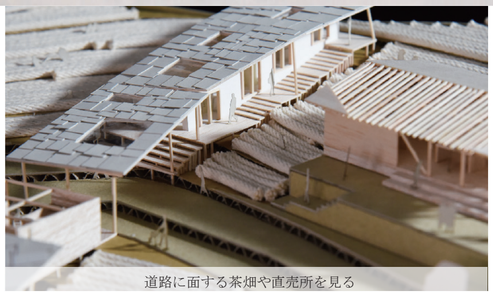
カフェエリアの飲食スペースを見る



カフェエリアの茶畑を見る



展望デッキからお茶畑を望む

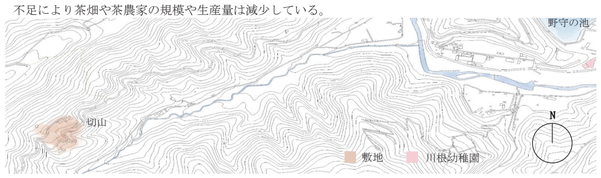


道路に面する茶畑や直売所を見る

茶畑に建つオフィスエリアを見る

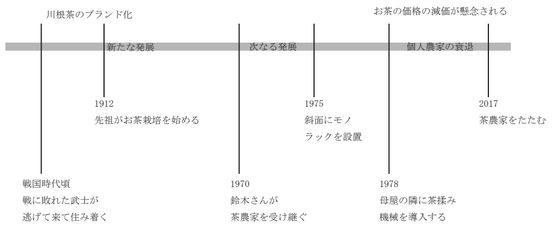
01 静岡県を代表するお茶の生産地

静岡県、中部に位置する川根町の切山地域にある集落。この町は大井川の中流域にあり、きれいな川の水を用いた「川根茶」というブランド茶の生産地として立地している。
現在、ペットボトル茶が主流となり需要が伸びる一方で、リーフ茶を作る個人茶農家の高齢化、担い手不足により茶畑や茶農家の規模や生産量は減少している。



02 集落の歴史の変遷

戦国時代に戦に敗れ逃げてきた武士がこの地に住み着き、その後、明治時代にお茶農業を始めた。
昭和の初め頃、多くの人々で賑わい茶摘みの時期になると家族総出で茶摘みから工場での加工を行っていた。しかし、昭和の中ごろから若者は集落を出、高齢化や後継者不足により離農者が増え、茶畑の管理が行き届かず放棄茶畑が増えてしまいかつての賑わいや景観は感じられない。



03 提案１　－六次産業化でお茶の付加価値を高める－

－高齢化した茶農家と耕作放棄茶畑－

住民全員が 70 歳を超える高齢者であり、高所で急斜面な場所である切山での生活は大変な事から、麓の町移り住む人もいる。また、各々が自分の茶畑を持つ茶農家であるため、現状、お茶の管理が出来ず、耕作放棄茶畑となっていて、産業として成立していない。

現地リサーチ

元茶農家の鈴木さんの声

「年々、歳を取につれて作業が大変になり、夫婦二人三脚で行うのは難しくなった。跡継ぎもいないため辞めざるを得ないのは寂しい気持ちになる」

朝日茶園さんの声

「川根茶というブランド茶は、元々高価なものではあるが、年々原価を下げなければならないほど需要が下がり、その分ブランド価値が下がってしまう。それが、茶農家さんに対して申し訳ない気持ちになる」

▽

a　山間部で生産されたお茶（今回対象としたお茶）

▽

小規模茶農園が購

▽

リーフ茶

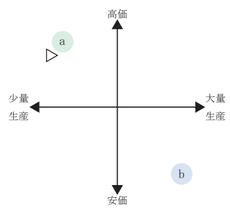
b　平野部で生産されたお茶

▽

大規模茶農園が購入

▽

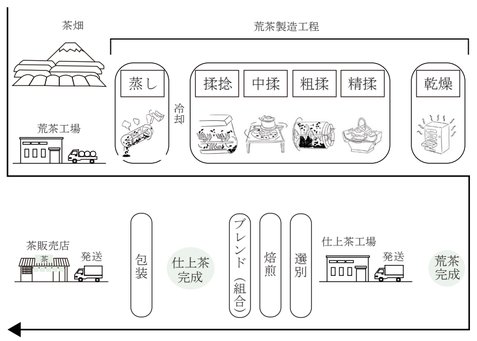
ペットボトル茶



－提案内容－

担い手不足の対策として、都市部からの地方移住者、二地域居住者、茶農家希望者を対象とし、対象者を具体的に位置付け、地元住民や茶農家との交流を通して、お茶の付加価値を高め、新たな担い手の創出や文化発信を促し、アグリコレクティブによる共助プログラムが茶畑の再生や維持管理を可能とさせ、新しい茶業の在り方を目指す。

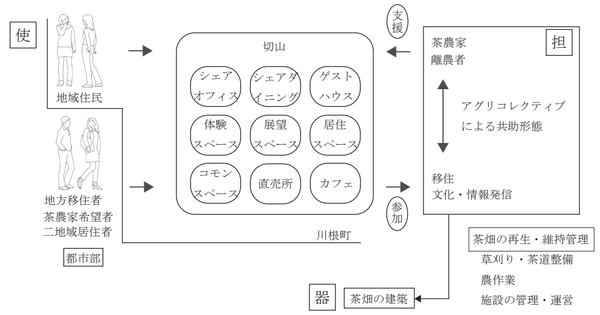
煎茶ができるまで



▽

茶農家や二地域居住者、地方移住者が空間をシェアしながら茶摘みから店頭販売までを行う

コンセプトダイアグラム

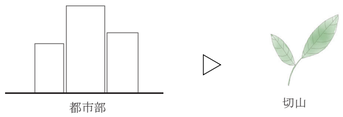


対象者プロフィール

作品名	農落 －お茶を嗜む、これからの茶業の在り方－	作品番号	2/5
校名	日本大学工学部建築学科		
氏名	朝比奈　登亜		

夫　：28 歳
職業：Web デザイナー

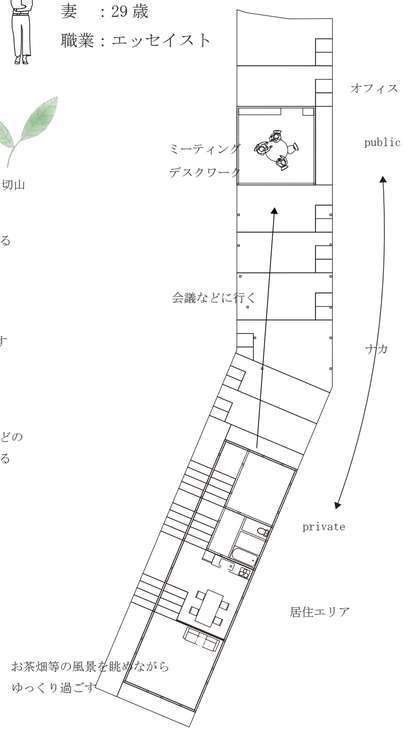
妻　：29 歳
職業：エッセイスト



休日や時間のある時に訪れる

都市の忙しい生活を見直す

イベントやお茶の農業体験などの
情報をネットで外部に発信する

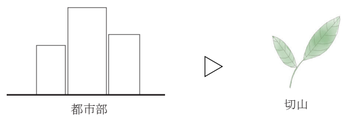


夫　：35 歳
職業：新規茶農家

妻　：34 歳
職業：翻訳家

息子：10 歳
職業：小学生

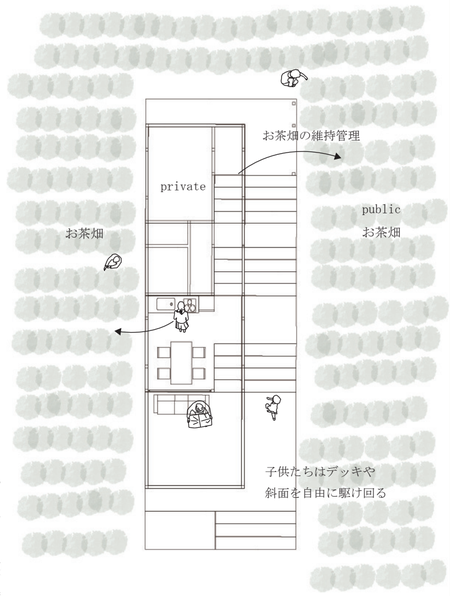
娘　：8 歳
職業：小学生



都市部での仕事からお茶農家に
転職しスローライフを送る

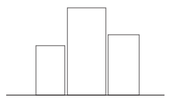
お茶の栽培から茶摘みを
行い荒茶の加工を行う

農業体験のサポート



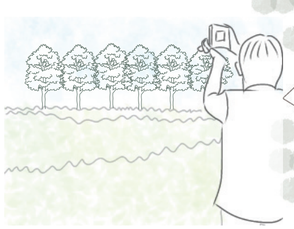
夫　：46 歳
職業：カメラマン

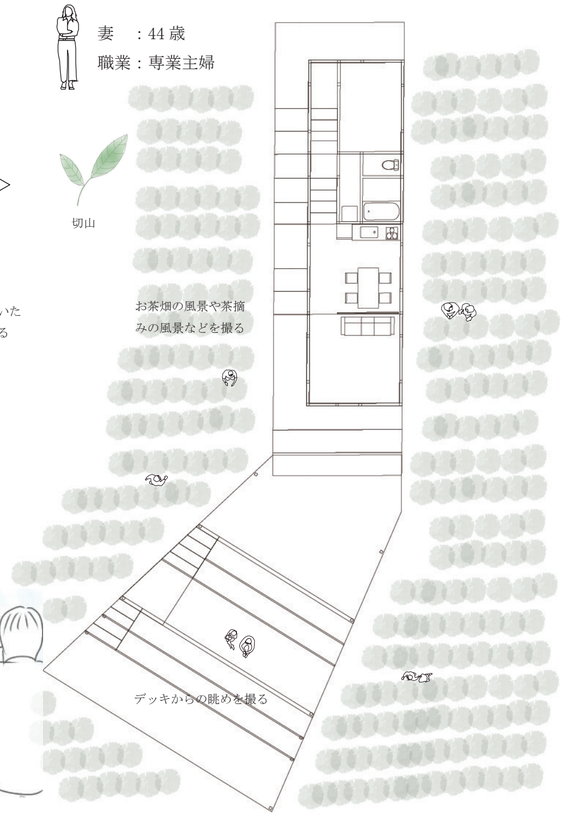
妻　：44 歳
職業：専業主婦



普段は都市部での仕事を行いた
まの休日やイベント時に来る

Web デザイナーや茶農家と
協力して情報を発信する

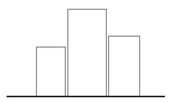




夫　：31 歳
職業：パティシエ

妻：28 歳
職業：パティシエ

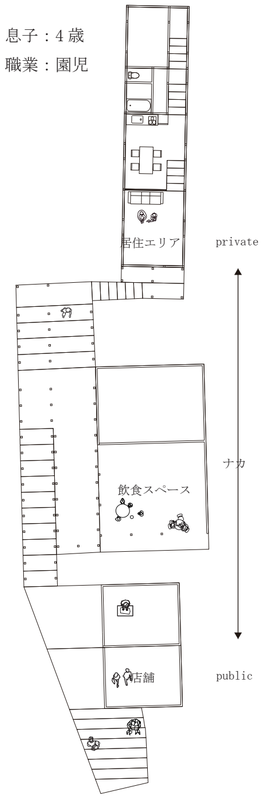
息子：4 歳
職業：園児



元々、都市部でパティシエをしていたがお茶に
興味を抱き切山に移住

切山でとれたお茶の葉を使ったお茶菓子など
を作り地元住民や観光客に対して販売する

荒茶の仕上げ加工も行う



04　提案２　－軒下に生まれるパブリックスペースの創出－

－薄れゆくお茶の楽しみ方－

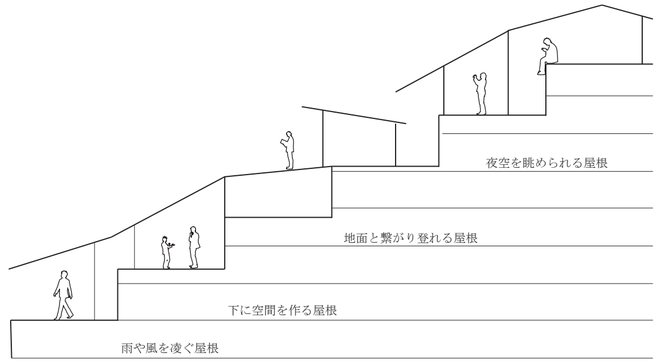
お茶と同じくして日本家屋には縁側があり、そこでは農作業をした後や寛ぐ時等、縁側でお茶を飲み、
お菓子をつまみながら、会話を楽しむ。そんな光景が今では見られない。

ひとりでのんびりと

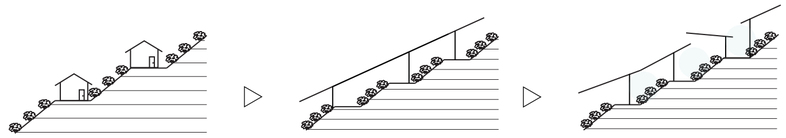
景色を眺めながら会話を楽しむ

－提案内容－

屋根というボキャブラリーに着目し、斜面に添うように上から下へ伸びる屋根が空き家と空き家をつなげる。その屋根の軒下に生まれる余剰空間を人々が交流する場や休憩場所として様々な意味を持たせる。
また、様々な勾配を持つ屋根は、雨や風を凌ぐ屋根、下に空間を作る屋根、夜空を眺められる屋根、地面と繋がり登れる屋根等、様々な可能性を持つ。



■ 断面操作

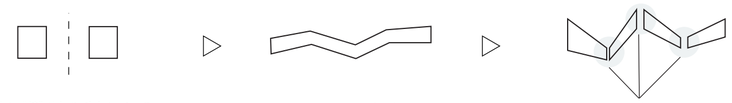


茶畑と民家が分かれて存在している

平地を茶摘みの時には休憩場所として利用

屋根勾配を変え空間を操作する

■ 平面操作

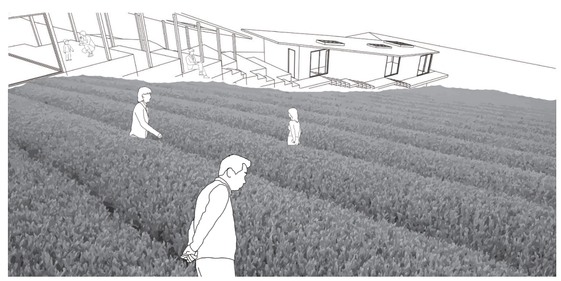


家同士に距離があり孤立している

屋根を伸ばし繋げる

軒下に生まれるパブリックスペース

■ 軒下から眺める茶畑



作品名	農落 －お茶を嗜む、これからの茶業の在り方－	作品番号	3/5
校名	日本大学工学部建築学科		
氏名	朝比奈　登亜		

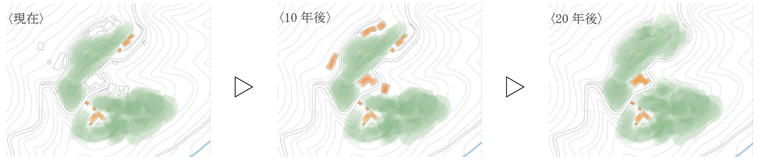
05 提案３　－原風景を損なわない建築的配慮－

－失われた原風景－

現在、茶畑の傍に建つ茶工場や住宅は高さがあり茶畑との景観が合っていないように感じられる。
空き家も点在し、茶畑もきれいなかまぼこ形状は見られない。

■ 増える空き家と伸び広がる茶畑

耕作放棄茶畑　空き家



住人が生活拠点を麓の町に移し空き家となる

集落の住人が全員居なくなり集落全体が空き家と化す

建物の解体や経年劣化により風化し消えていく

－提案内容－

空き家に様々な用途を持たせ、人々が集い交流できる空間へとコンバージョンする。
傾斜を生かした建築物を考え、茶畑の原景観を損なわないように配慮するとともに、ヒューマンスケールも考えて計画する。

■ 空き家の残し方

景観を保全するため空き家は取り壊さず、躯体を残し、新たに壁やガラス、屋根を付け活用する。
通風や採光を確保し、開いた建築を創出する。

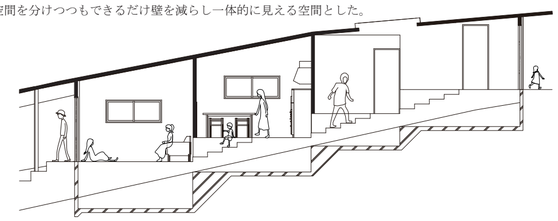
茶畑の傍に立つ空き家

廃れた外壁や屋根などを除去し躯体を残す

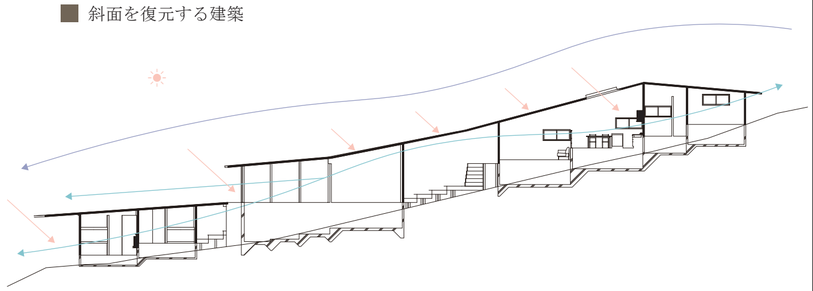
既存の躯体を利用、建築する

■ フロアデザイン

傾斜地を活かし段々状の居住スペースを計画。
レベル差で空間を分けつつもできるだけ壁を減らし一体的に見える空間とした。

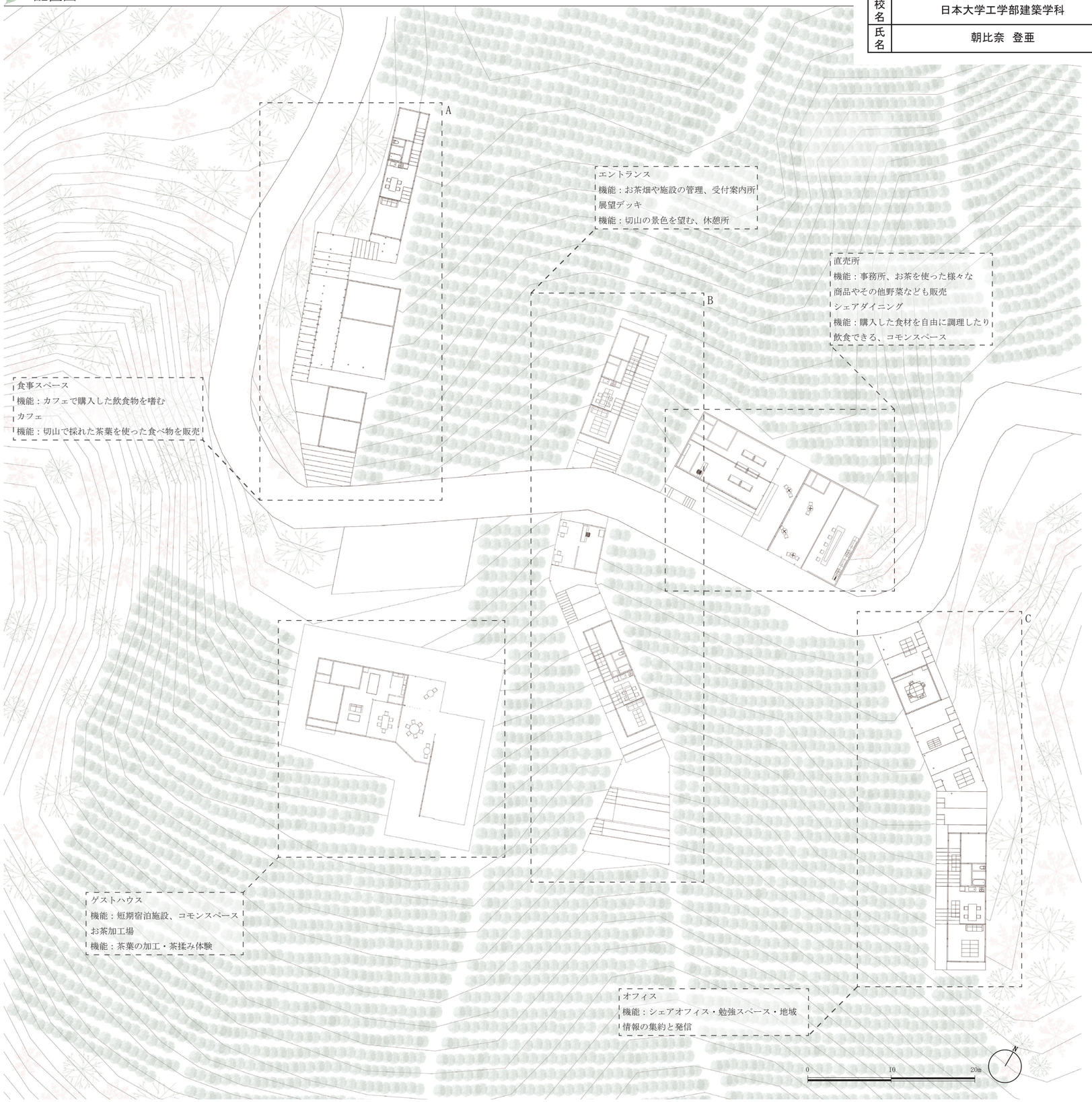


■ 斜面を復元する建築



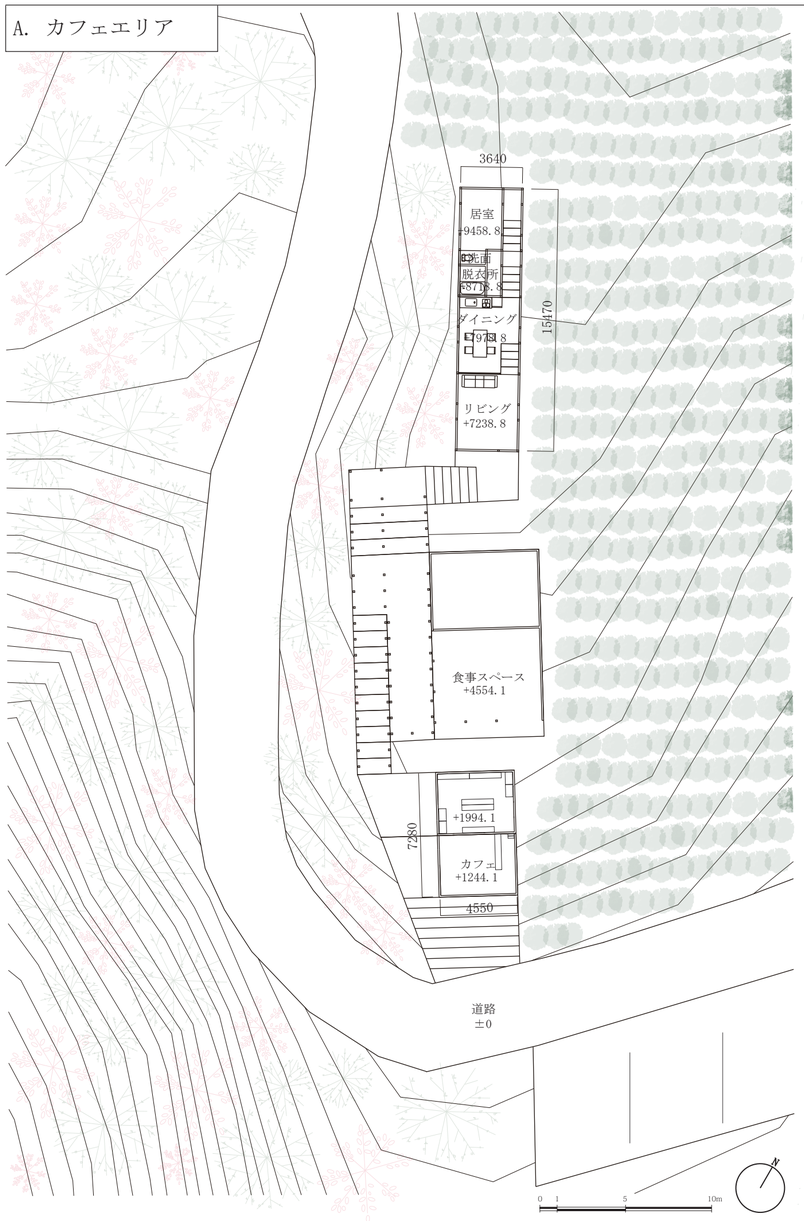
山間部に発生する朝霧や霜害が上から下へ流れる特性を考え、斜面に沿って建築し、また、壁を設けず柱と梁と屋根の軸組みがむき出しの状態にする。これによって隅々まで通風をつなげ、光を受け流す。
屋根に溜まった太陽熱をダクトを通して RC 造の基礎空洞部に送り、その熱を室内や茶畑に放出し暖房として利用する。そんな斜面を復元するような、斜面に寄り添う建築の在り方を模索する。

06 配置図

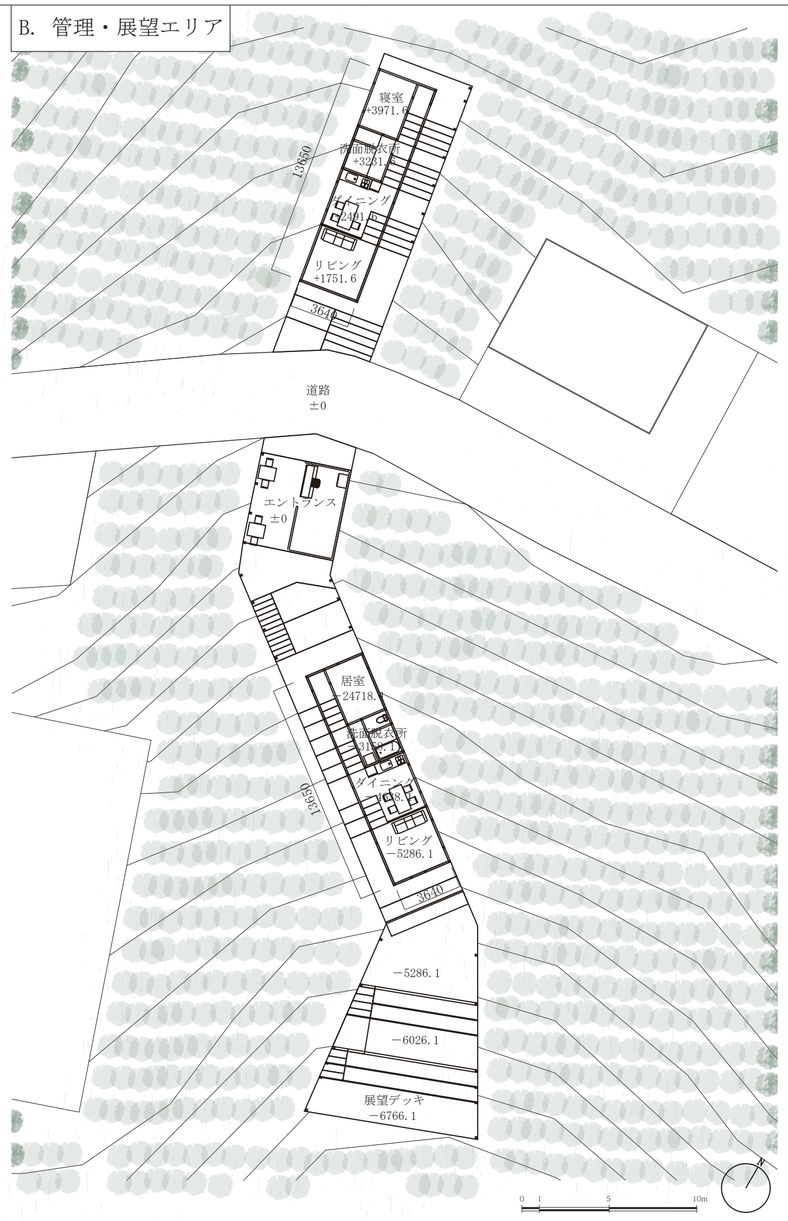


作品名	農落 －お茶を嗜む、これからの茶業の在り方－	作品番号	4/5
校名	日本大学工学部建築学科		
氏名	朝比奈　登亜		

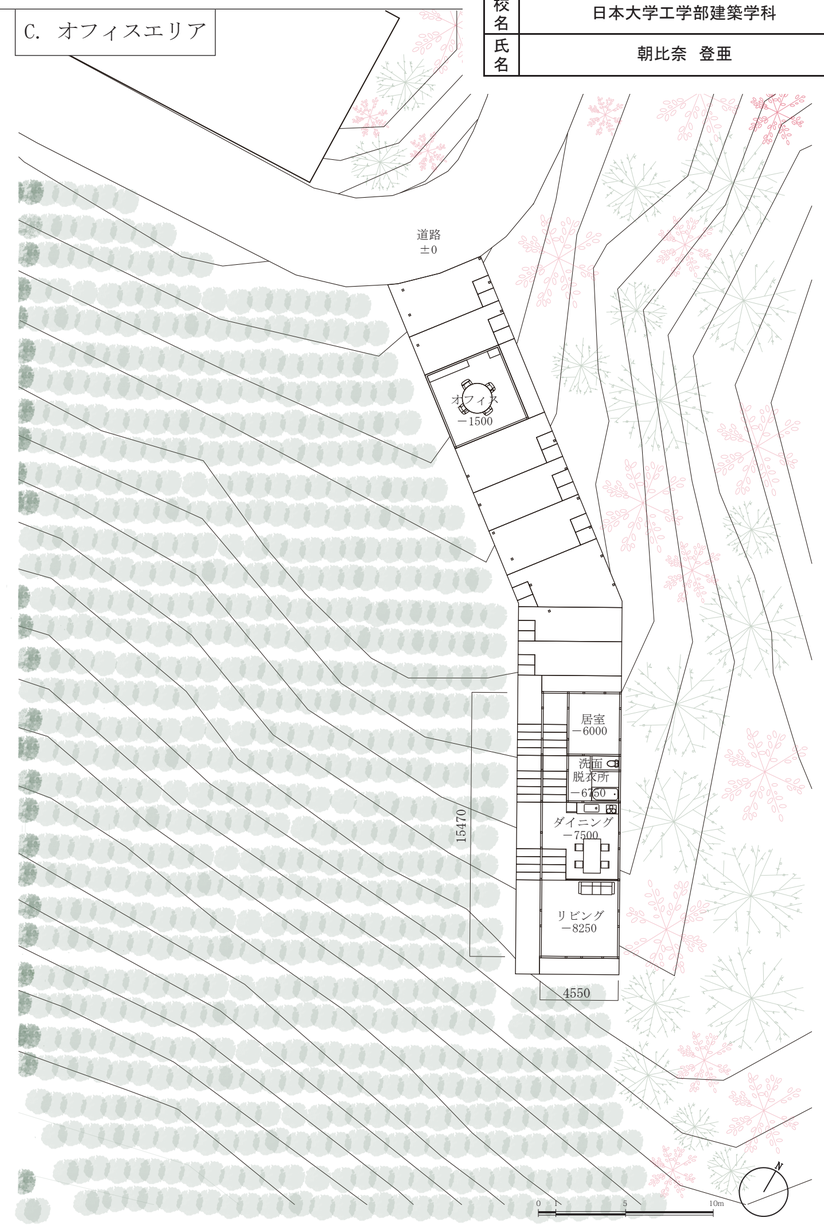
A. カフェエリア

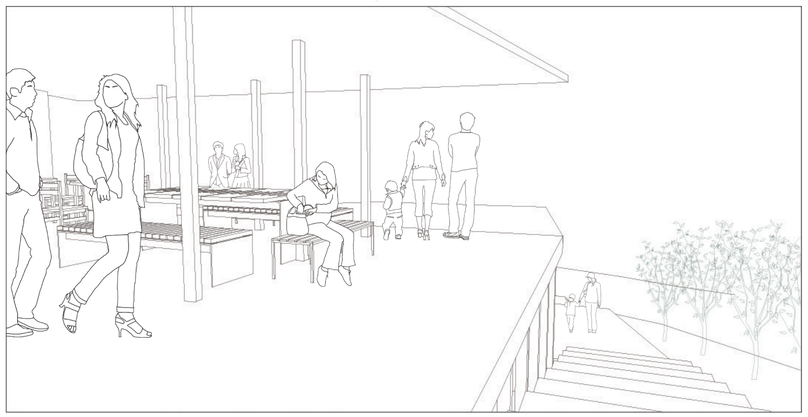


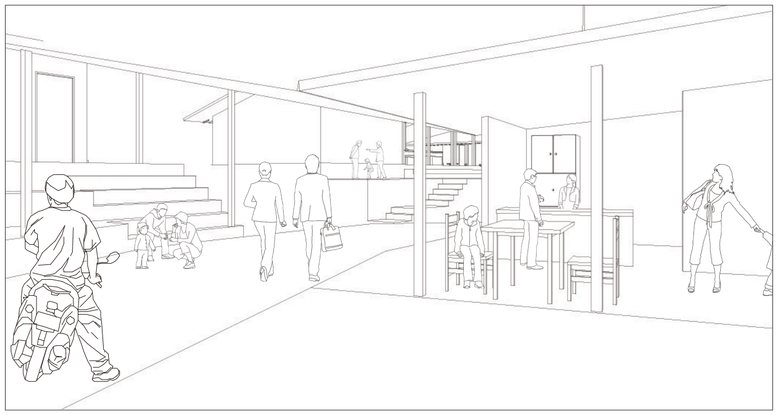
B. 管理・展望エリア

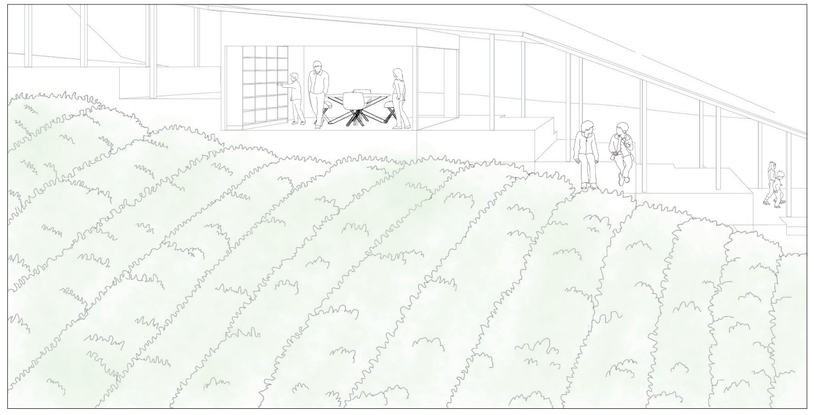


C. オフィスエリア









作品名	農落 －お茶を嗜む、これからの茶業の在り方－	作品番号	5/5
校名	日本大学工学部建築学科		
氏名	朝比奈　登亜		

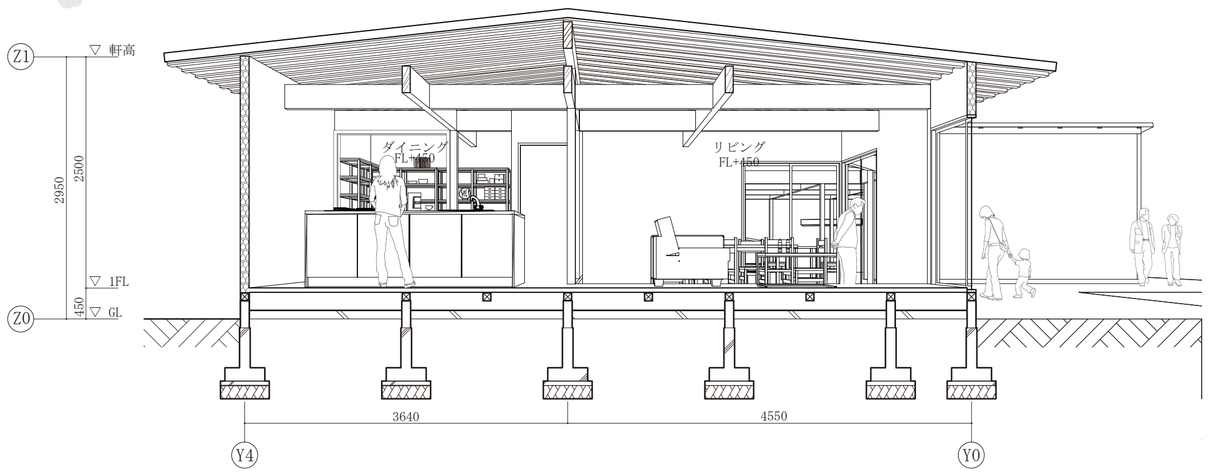
06　空き家からゲストハウスへコンバージョン

【空き家　→ゲストハウス＋お茶工場＋体験スペース、階数１階、構造：木造軸組み】

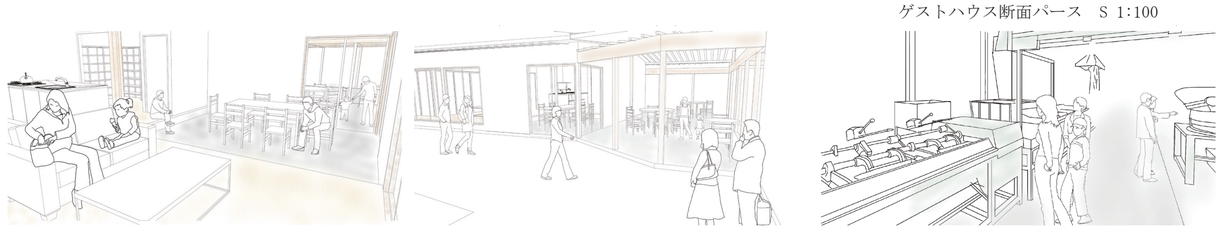
設計手法　－土間空間を残したコンバージョン－

集落の景観を可能な限り残すことを目指し、空き家の面影を残したコンバージョンを行う。
元々ある土間空間を残し、居室や台所をリノベーションを行い、若者でも住みやすいようにする。
そして、土間空間は宿泊者や茶農家などがお茶を嗜みながら交流できるコモンスペースとなる。空き家と空き工場の間ににある余剰空間に屋根をかけ、空き家と空き工場を繋げる土間空間として要素を与える。この土間空間が人々の多様な動線軸を生む。

配置図兼１階平面図　S 1:100



ゲストハウス断面パース　S 1:100



06　空き家から直売所・シェアダイニングへコンバージョン

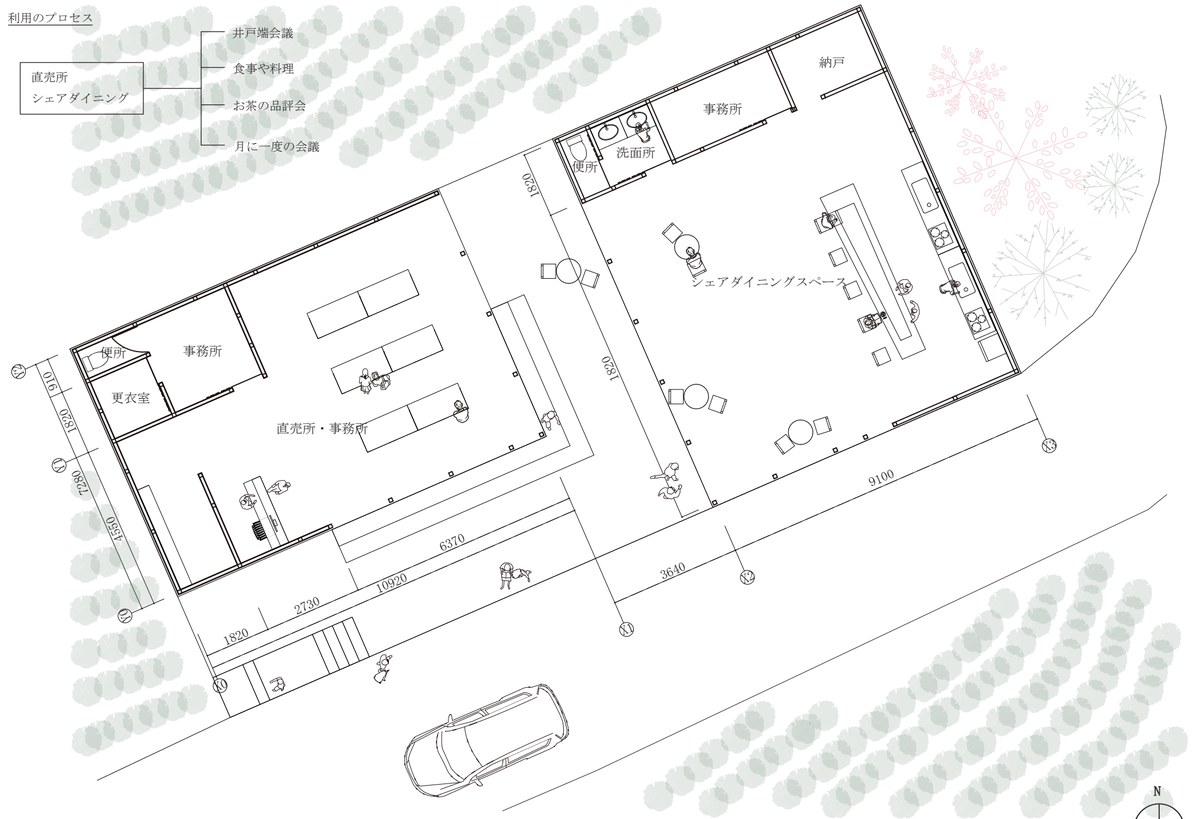
【空き家　→　直売所＋事務所＋シェアダイニング、階数１階、構造：木造軸組み】

設計手法　－面影を残したコンバージョン－

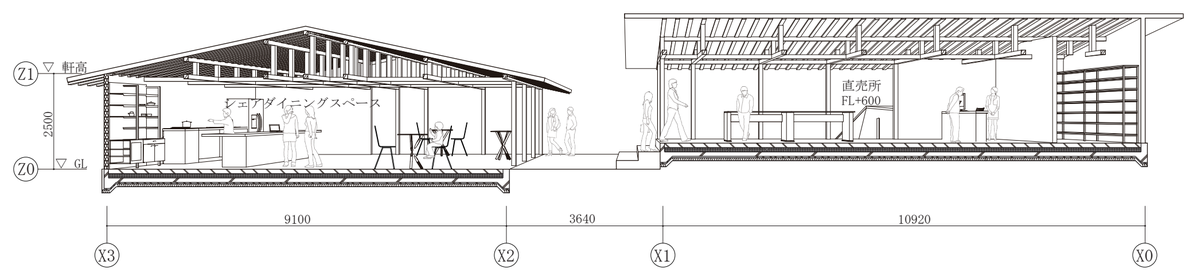
直売所は、集落で採れた茶葉や加工品、その他野菜等のお茶以外の商品を販売し、茶農家や地元住民、観光客が訪れる。
シェアダイニングは、直売所で購入した商品をシェアキッチンで調理してシェアダイニングでまったり食事をする。また、皆の交流スペースやちょっとした打ち合わせ、ワークスペースとしても利用される。

利用のプロセス

直売所
シェアダイニング
- 井戸端会議
- 食事や料理
- お茶の品評会
- 月に一度の会議



配置図兼１階平面図　S 1:100



ゲストハウス・直売所断面パース　S 1:100